一ー五

伊地知文庫
文庫20
1
1

夫和歌者兩儀剖判之後萬
物未成肇傳自神世迄テ人
代既緜章句衡ヲ慈文字介テ
風賦比興雅頌之六義ヲ呈ス長
短旋頭混本之諸躰ヲ是以詞
林畜蓄花葉之艶ヲ思泉弥
添潤之流然ニ連歌者其言
約ニシテ其旨遠シ義魬周詩躰ニ合フ
和歌ニ蓋シ日本武尊与ヶ蝦夷ヲ嘆
菟玖波之艱難ヲ中納言家持
寄言於梅川水ニ業平朝臣傳
情於逢坂関ニ天暦御門遺叡

伊地知

有ル嵯峨ノ内侍、北野天神ニ告ケ天ノ御戸ノ衛門ノ督是ヲ撰入シ幽玄之事通ル神妙ナル者也。中葉ヨリ以降雅詠愈轉シ篇什相聯ル。四眠之昔ハ家々業ヲ不ス故容ニ方處之情性莫シ不ト吟詠匪ニ齋述ス日抄之風俗ヲ、剰ヘ採ニ漢家之故事ヲ。然ルニ則代々重ネ至カ之撰集ニ、家々前備ヘ為作ヲ。執リ於或ハ詠花下ニ、或ハ嘯月前ニ之輩、美誉ヲ難盡。後世ニ佳句不傳遺ヲ意ヲ。嗟乎惜乎。而今花ノ隅ノ風騒ハ、京洛依陽和之仁ニ、柳営霧路遍ク遍ク潘祐之天

均シ之恵ニ、民義教化ニ成ス孝敬ヲ者ニ舒ヘテ幽情ヲ、常ニ綴ル微詞ヲ、或ハ為ニ凱詠之媒ト、或ハ為ニ教誡之端ト、賢愚齊識ル。前尊卑以隣心元不審詞宗通茲ニ以テ且ツ請フ笑見之暇ニ感ニ序文ヲ叟字之志述而不作。名ヲ曰ク菟玖波集ト。不分古今之作、不擇上下之句。其枚二千有餘。雖鄙俚詞、貽來批之嘲ヲ、峯乎於鄧林ニ繞ル峯ノ一枝高ク、自於崑山ニ遍ク於片玉ヲ、辟ヘハ猶窺矣以管ヲ測海ヲ以蠡ヲ。乃広幾傳將來ニ侍ツ能者ヲ乎。于時文和五年三

月次六日編緝已畢尋芳隆
之道ニ意ヲ佐保川之流ニ云尒

序ことのはは天地ひらけ
しよりおこりてちはやふる
神代よりつたはりて人の
しわざとなりてそ句をとゝのへ
五文字のかずさだまりけり風
賦比興雅頌の六くさとさだ
長短旋頭混本のさま〳〵は
すがたを定しよりことしの
花鳥をもてあそびおもひのあはれ
ことをそへすこしかきあつめ
五十数はつまなやましく孫ひろ
くして文のつゞりける書のさかな

にかゝり月は秋なるは夷のこゝろし
とやらしけてつくる旅のこゝろし
なさけをとゞめし中納言行平
はらかい川の水にわたしゝねをとの
へなりにおもはゝあはれさうせき
にあらけとこゝろ天暦のむかしは
後撰のあつめしことゝものゝとの
うし北條平帥は相ものゝ所
へり行をしらけ好つゝと中絶り
このころの世事にひつゝ旅
世人のうわのかくつくること
になりにけりしれしもとむてある

ひ子親とまうし月をなそへ道を
あらわして心空の季にうつさと
しれまての句にあらはるあらは
連歌にまうしあるは哥をとう
ミ君をいひ神とうやまひ
作をあふくのことに行てはやまと
ゐなしの人つての世ういりき
てもすまてその心をしへてあらせ
いふこゝろんなりなる加りなし
代しのひしりのこゝろしも撰集
にくいかれこのたとをとへるへも
我月をつくりて久しく空の

上のもてあそひ花の心のみならす
まさる御まつり月にうそふかせ
にあさなゆふなうちその名をここ
ろにそへいひまき竹のそのふにて
すゑをこそ花のうてなに給ふ乃
玉ひろひ集めてこそすく
御和哥のみちの光しるし和哥
しきとなる弥ますますさかんなる
志賀の古を今花園風にさかり
柳営よりあまねく及ひして天
下の草木までもなひくに弥へ
うるほひは折にまさることのそへ
まつりこととなりけとうしてあさ
なることゝのへて繁る
矢をおさめ武をやすめて民
を安しかるなさけらして
つしこゝにおさまるなるを播手た
くさ花しとゝまる子常忠
とのみちはこゝになまりけれは風
の情むかしさらに山けわかく
名のことしくらうる事信も
かりなしこそ旦ことを夕
にまさる弥まりのいふまさく
あしといへるも及てあるを見

こゝろすゞにあつめて享保
集しいりしへ今ときよす
うゝしもの句とさゝめすえら
つらすみてらてにあまりて
のおわそうなるをとへりを後の
あとかりともていへもとえ
えらると万に志てもりれお
らのしのみちことをふらりてあり
て風のみてすみてありしきの
うしわいゝわさなるふしを
おらゝすして陸の書きとき
ねうしくし今ひろいあつめて

ことのはしそのねすなはちまことを
善をもて言の葉をとうつくしひ
題をひてうつるをとゝらん
うゝし志なれまことも姿を
あし代々のうしとわんとく
うへらりひらのいやしきことわ
さはまへるそうまてをうしあけ
てうつしけるおもなるなるえ
せとなてあしあまゝへしこ
をこゝしのりにあすゝへらつこ
まちをえもたも縁をうゝも
あそにうへる秋をえんつりとふ

一　于時文和五年三月廿
五日なんしるしとゝめるを
ことはさらにいやしく
するあゝひいかしつと志のひ
ことをもて以ての菟玖波の
名をとゝろかすはかのみちをもと
と志りて扨まきをとゝけすることを
こと志ゝなり

菟玖波集巻第一

春連歌上

宝治元年八月十五夜百韻連
哥に
山かけしるき雪の村消ゆく空
　後嵯峨院御製
あら玉の年の越ける夜半や
猶起ぬりて三のかゝらず
　前大納言為家
もゝ雪し行毎のたけの雨哉
山の桃井の房にて百韻連
哥侍しに

常に氷るゝ志かのうら波
二品法親王

雲ゐよりたかき山にぬれてそ
月の影ことよりも空遠望
前大納言尊氏

祝ふるは君か代のゆくしかるそ
右大臣に仰しとき家の百韻

発句に
花遊けれは山さくらの春と云句に
暮をさそふ日に残る松の雪
うらのさくらや波に花咲
周阿法師

幸山ハ名にもありて見えけん
舟路の他のしらぬくもそ
救済法師

松かけの雨なるこゑし我なれ
こゑしる人の袖行浮し
後深草院少将内侍
うらハ　のもとろ乃眼かの
舟路のまよひてもしらけ
導誉法師

ひとゝ見き渡世のみちのつれ
新袖うけし風のふかん
前大納言尊氏

仏保雁のかれの[illegible]
後鳥羽院御所白良之賦の
乃まうち君たちに[illegible]けるを
おほみこ[illegible]山も春をうけて
従二位家隆
かすみ[illegible]花のし中き
弘長二年八月将軍の屋中吉
韻生かの手を
右府の月もおもひかけて
福光園院入道前関白左大臣
ちるの中さそふ中ちるらん
正月乃ら行はり風もさして中き

おもふ日月に年々して
しろき[illegible]信濃物を房
ことし無行々
前大納言公任
すてにもろ有心化にすまひを
権大納言を
宜しく中ら[illegible]花にやまふらん
ちるかなしき年月経におもひ
右近中将義詮
中きの松も千年に株て
常盤木の色そで万歳生に行て
君をそりえて松しみて

源頼政朝臣
枯残る老木の株に花咲て
昨日消し煙の後に見えて
前大僧正賢俊
此山ここに常なるもの空
埋木なりし春をしらす
権少僧都永運
谷川の流のしば中に消て
あらしの音のみそ残る空
富豊（とう）法師
月てらす雪もさえたる今宵やそ
去年見し花もちるをこそ松

性恵法師
山寒はし庭の上に中に消て
乃行もてくもの中に流れ
託阿上人
山もとの霧のさいて上に流く
句の中にも合えて流れ
頓阿法師
住よしのつもりたのむ法の綿
松かねも見てもくもれる
慶運法師
山さとに中に消なくて
木あへ棚に高き流の松

源顕氏朝臣

まことはおとろふ明かのあかし

あかしのうら松のむしろに

源兼氏朝臣

さやまはそのことはりも道をいかなる

國くもおもふもろ人はあはれ

円阿法師

待せしまたはしうらの明かの

谷乃小川や水まさるらん

前大納言為家卿

宿もとめのゐさをまち侘く

とりやあはせし社つ乃ほとり

本ノミ後光明照院前関白左大臣

詠格し（○後光照院ともか）えし白梅咲く

都まてもこゆるやまよりさそふらん

後鳥羽院御製

中ことすゝみなくひとつのもと

建保年中空円院の庚申

百韻連歌に

年の内よりしるしをも向へく

従二位家隆

萬乃世まて春もいかならん

もろはなく花の色宮にみえて

後二条院御製

梅かゝほる中よきの下風
つかふ身ともしらてや来らん
岡本前関白左大臣
山人の梅のかさしに花咲て
とをきもちかくもしるき春を待
六条内大臣
墻根にはかくしの梅は枝もなく
さこそ有けし袖にも誰か香を寄
前大納言為氏　為氏卿
難波の梅乃をるにかゝれ
我ことゝなるそふ尊の声
二品法親王

梅か香をそらにへたてぬ風吹て
北野社乃手向まつりて
またも老木のもとの下陰
敬源法師
松ある思梅の匂を風そさそ
枯木ともしらし花乃咲まゝを
孝参法師
梅かえのさらのかさしもおなく
寛元元年三月法勝寺花
下にて
花を摘しいそくけふとこそ聞
寂恵法師

梅の花白くかゝりけるやへく
寶治元年三月晦日當座百首
素暹法し
きのふよりくる尊乃声
神垣のまつをとふに松風もして
法印祥湯
その二月七日もなほある
木のもとひとしやしからん
源和康
三月雨ふりける日よめる
都出でし上のまちなる花の
後深草院少將内侍

月やむかしいまやながめん
元亨三年七月亀山殿七百首
題寄月に
おもひ出づればむかしのまゝのこころひと
後宇多院御製
老の世にうつれる月にへてこそ
そのむかし思ひやるらん
関白前左大臣
月みればむかしを雨夜のなごり
花のもとにそれとしも都のかたぞん
二品法親王
同七百首かへし月にうかゞひ須

雲とも思へてさすもかゝれ
権大納言良光
出るさも見る月のおもかけ山かな
前原俊親長
夜もし雲さたまれ月出て
法勝寺花下乃会にて
毎くれはとおもし梅のまくれ
良心法師
おもへともやる月影まて移ひて
ちる花のあまりつくしてあきらこし
信照法し
おもへありとも月とまちこそや

ちる花も未外東福乃山
本照法師
月影もさく夜のまつのかけさえて
さくみをもちや共とめね
前大納言為世
面影さゝすむ春の月
つまさき柳や洞のさくらん
前大納言為氏
春の比やてもおもへはかなり
救済法師
春秋にもおしかけしたり
又やさん春の月の影をと

月ふけし常山のはやそ在らん
素純（暹イ）法師
そまりしこゝに明しもろの夜
在明のつれし、枕にそむけて
前大納言氏忠
別かへるさまもろの上の夢
宮居する身も乃為在乃緒を
前中納言家経
うらひ出行し明かのてる
おもひ越夢も昔かへりて
源家宣範
まくのよはつゝに明くく
哀れより出し山をそへて月の影
運（蓮イ）智法師
うきのもろゝまに浪風もなし
山のはや白在てきて出ぬれハ
藤原親秀
おほろ月上のあけのそらも
まくらよりもさえゆや人の袖
高階宗成
もろともにねよゝと秋らしゝて
宝治元年八月十五夜百首（並首に）
昔より人ゝ為秋をたてゝ流く
後深草院少将内侍

そのゝとくかへるさうき
後光明照院前関白左大臣家
百韻侍りしに
おもしろや春とはいはん
忠房親王
ら余にしはのさとを住家にて
け月と云人あかぬ花かな
後宇多院御製
雲水のゆくもとゝむるやすからん
隣きこしもまたやめこそ
常盤井入道前太政大臣
詠ある御くもちかのうら人
そなたの峯ハ高く秋の頃
前ゝ家季経花
遠里別のうらのなかまく
月影ハくもしもにおほす寸
花のなかへしも君か書して
名残や咲しをりかはるらん
太宗前内大臣
柳の枝にはちりもなき分
宝治三年毘沙門堂花の下にて
くちもさゝえやまふきの山
道生法師
打なびく柳の枝の永き日に

正和元年二月法輪寺にて
ありしも花下の[illegible]ありけるに

善阿法師

松かせも柳の眉のうすゝみを
東風つれなくも[illegible]行ける

[illegible]信照永運

水の面みりや柳あるらん
今いかし寸月も永のれ

救済法し

白雪の玉の緒を柳糸かけて
たえぬ月を垣ねのまろに匂ひける
知園にて乃花のにほひ

若菜の年に[illegible]しを
法輪寺千句正和元年
侍ゟもちるのきしにて須臾

善阿法師

うすも煙に年乃にかなん
前大納言為世

桂のみかしのちるは志つまる
建保五年四月庚申百首
生年に
以来のうたと詠めけるらん

後鳥羽院御製

秋さくれもるの河やの[illegible]

きみか前ゝうけ乃松かな
関白前左大臣
ちよの日に山てらかきとし書かゝも
文和三年七月に人のおもひにて
まかりつかふまつりけるに
草木も同しおもひの時をしるらし
主上御製
野山のもゝも雨にぬれのもる
題しらす
日かけさすもゆふくれの月
ちるひらのをりもらす花咲く
我やとまとのもとそゆかしき

左近中将義詮
櫻まし花のさかりの心はゝく
貞和四年五月朔日百首歌奉りし
とこよには梅のにほひのうへ
伏見院御製
新のきくしは光りにそせ孫
弘安二年八月院の百首歌奉る
りゆうとみのうらにそまする
山階左大臣
まきかにことしもこれはてかかみ
さ行の大宮人のうらみ
前中納言定家

一夜ハ花のあはれまさりの下伏
みそとらするかりやとなり

後嵯峨院御製

志らし寸春のあらしの花の陰
見ゆるまてわけ行我たかと

花山院入道右大臣

まちかの志つくや春とかすらん
雲とかゝる山にもまさやらまし

前中納言為定

世の中にも春をさへて見桜かな
法輪ゝ千句まさりに
花のそこに入れ乃子

頓阿法師

さくら花なかもかの陰やなりなしん
おもしろきこそ今ハ庵室

性遵法師

山里に月出るまて花をみて
うかれまさるものゝ月

良阿法師

小草の中にものなき木のもとに
うかまさりとて同じからん

十仏法師

山さとに花ひらきとて出けれ
北山の花をみて帰りけるかな

かくれ家の松をさびしく一条
の古径をとはゝまたらしきの
ゆかり女の声してやさしく
も花ころもかへしひはれ
しほりおりて
菅原基政
武士やころもして綿まくん
御らの御らの寸をゆるす
藤原隆祐朝臣
こゝろしくる峯のしる雲
ゆりてくてうらのつゆ
尊澄法親王
すみなれしさとゝいふ人のこゝろもて
紫のいろまさりても霞の野
前中納言有光
山高み我ゆくしのいそぐ
うしの声ほまされて花さく
権僧正良瑜
月のころ花の外山のあさ納
二十日せしはちれそ千すま寺
源高秀
松ゝやまちのこをして菅様ん
いかしへのちるるはちへつるそ
称阿上人

老木ハちるもまゝにはなこそさけ
おもひ出して宿をとはなん
教縁法師
ちりはてつや我をもとふらん
さそはれてこを送る山風
登蓮法師
旅人のたちよりもちるの夕くれ
山住のもろやまのさくらん
関白左大臣
なかれし昨日のもと見し花咲く
まちられしいまはし花のゆくへ
二品親王
ちる一ときの花（もる）をすくなきと
春のゆやられのそらとくるらん
花園院御製
ちるのこりて水のしらなみ
上東門院中宮と申ける時
への扇にすまゐ絵にちるまへを
見えて花ちりし伝絵にも山
咲とほりて山里の庭へさし
入ぬとて
伊勢大夫
本ノマゝ
なにゝてやらしふかそめそけり
ちりけさそあまたいくらもちらん

大峯権僧正

この春もまたこん春しまたなら
ひらくるとも花やはちるらん

西行法師

色ひとおしともとの下風
山里の夕暮月さそふなり

前大僧正慈円

ちるをのうけしや花のちるらん
見れめる山やさきくさくらん

権中納言公雄

しら雲のいくへの花もさこしらす
之年二年布かくの花のうけ

よろ人のまさつ人まさりけるを
今日かし春の花の句ひけ

後嵯峨院御製

月ひけましりしの花の雲のと
みなそおもしろくおしきを

前中納言為相

ちるはなのかせにふかれて山さくら
中こそいくえはなにまふらん

円久元

山さくらのもとにふしてみれは人とふく
建保五年に月のうちの庭中の
哥合に

咲にけりやまちの花ならん
前中納言定家
ゆきとしくらす花のまやしい

菟玖波集巻第二

春連歌下

うれしさのはるのこゝろくもる
前大納言為氏
名もそれとしらて行く花桜

後鳥羽院御所百韻連哥に
作ことに
あかしらは都もところ
知らぬちる花　前大納言為家
よしの山花さかりの明かたに
あかし春のゆふくれ
夕顔のつゆふかき色うつる
後鳥羽院御製
まつみとしくふねうつるかな
元亨三年二月亀山殿百韻
連哥に
ゆきのなこりをえしるや色ならん

後宇多院御製
たのむとよ見すつる志賀の山越は
足引の山のしるへくとおもハゝ
後深草院少将内侍
のそてもあらしとうらしくしても
正和六月朔日百韻連歌に
萬りうすのなをそうかしさ
伏見院御製
花ましろひかりの風吹なく
もろくりハるゝをそ振しき
常盤井入道前太政大臣
今いくらハ花をとる人をかる傳ゑ

かすむも夜ハ明る蒼空もまたとつゝて
後光明照院前関白左大臣
たのむのひかりに月そのこれる
夢もうつゝもこゝろかとそなし
存覚法師
花とやくいつらしハやまの桜花
花山院入道右大臣花の比住
何ゝる山さとの道のすゑれし
とつくそ帰りて（の堂）
攜てそ帰る宿を樓とゝ云
とり何ゝれし
頓阿法師

花とそいつ夜もかへさ山ここに
雲やかすみのえんなるらん
慶運法師
ちるからに山乃端しら月く
あけぼのも枝のかくれさそ霞て
兼好法師
ちるまゝにかへしら山のもとの月
二品法親王花の比西芳精舎
にて当座ありし何人々を
関のかすみに夜こそ明けれ
頓阿法師
月かけは花のかけにそ霞みて
むかしのまゝにかはらさりけり
頓阿法師
惜道し花も老木は又なりて
ちるをまてこそ社てみれ
前大僧正
惜亮し人をや花も思ふらん
あけまくそ人はあらしによそへて
権少僧都永運
雨ふかくともちるまてる空
雲こそ山の高さもまされ
権少僧都性宗
ちるやつとをえしはなすらん

額宮移する夢に聞ても今そしるり

法眼良璠

つとしもかわ乃本位

命をたのし方傳にせし

法印玄恵

まし庭に花の若木を植置し

宿も今すゑもろくのおる

咲ちしる花の数しの松として

うきあるりしの縁つれ

中納言忠親

またと岩の松をかつ風

志かくのうしへの跡はちとせふ

照珠上人

松の木も今にはかゝる梢かな

その二月の緑をとそえん

孝宮図師

一ゑみ花や在りしのこゝろ

雲霊方精舎の花の比孝宮法

師池水に舟をうけゝ古額

生ちの作し中に

雲にうすゝや立くもれん

二品法親王

春にさる花を谷の松かれ

後におゝへたし春てうたし

寛胤法親王
引とむるもくやしきは花の別れにて
いつまてとて春もあれ

守覚法師
よしあしを花にとゝむる人命そて
月称し後の行さゝもしらさりけり

救済法師
なかゝるまての中きの文たれ

関白前左大臣家百韻連哥
わかれのもとにおもかけの夢

大江成種
月まちる花の山風よそなれて
にほふ月ゆきらゝとまる春

前以高秀
人をまつたよりもめつる花散て
君こうつほとに松乃たつしら

関白前左大臣
ひるまてくる山にこそ花の流前かく
まらしとて向るつへしなり

左近中将義詮
散花の流るゝ山や千もとらん
春の日や神のひらきかねらん

左近中将義成
おちてもとなからてまししろ

とまらぬ春の別まてをしまれて
権大僧正円忠
きのふのくかハおよふの山風
うらみてけふハかゝらふ
従二位行家
白雲の志かの山さくらちりても
出やらぬ思乃月ハ木のまにて
前大納言為継
めつらしきまたかやちるらん
ちるやいろくもなこりかねん
二品法親王
四方にちる花ハ一木の風なるを
世をやめくるも今ハとまらす
前大僧正賢俊
枝色の木のもとことし花ちらし
山も晴まてハ別の名まてこ
前大納言尊氏
まちわひる花ハうつきもいかに
いつらん上よりりこそ世を
善阿法師
花よりもさきにちりぬる風なれ
うきもうつしハいつらゆかし
頓阿法師
ちりやすき梢にかよふ松の風

まいくかこれもとるの別路
周阿法師
明日もえん花為のこゝろ夕行くし
吹かはる風のまゝに侍て
前大納言為家
おもふらん見すしらくそこふや
夏風にもよそふてま吹上の
称念院入道前関白太政大臣
ひろえたるかに秋へらし
一村の松の木のまに隙をとそ
関白前左大臣
行しくるゝ方も浮雲
関白家百韻連哥に
おなし人も今そとりみなりける
救済法師
雨ふる花の夕の山おろし
名をも忘れしや人の雨の庭
荘ノ宗秀
雪の後も花をとふ人もこそ
新ふことまよふつゝ有明を
源信政
別もおもひつゝもあやしらるゝ
月をそふとまりの山のこと
周阿法師

庭しろく花に木末の風こえて
ちりしおりして鳴く雲雀
円位法師
日もよほる雨迎への夕ぐれし
ゆくとまるて谷川の末
源信武
風そ花を毎にもちらの又ちらく
雲に入山路のさくもまた暮けり
法印時宝
まつを声てひく鳥やなくらん
あはれのたくる月日そこしつ里
（高行）
源高範

咲そめし枝より花のうつろひて
とまらぬ色も人のうらむる
源親之
訪ひし木の下水に花ちりて
流れよりうへにうつる山さくら
権律師定暹
おしなへて見て激のしほ
天台山眼房上のおのこも来
山のもと日見にまうりくるを
本二りのこうしの枝を折て
挿させて帰りけるをとて
前少々高之

よしのは櫻まのこる春（けり）ぞ
源能正郎丸
ひと思ひといそきこへけれと山ざくら
うき身ならしや宿も定めし
源義仲
よしのなる山のこゝろを住かへて
かしこしもあさき山ざとの庭
菅原能縄
櫻ちる木かげの苔しろきまで
文和四年五月関白家千句
生方上
烏為範の内にして二十韻

とゆらき
救済法師
よしのゝ花やよそとこふらん
咲ちるも越し神代らの山
前大納言尊氏
川
流花の文ちる花ぞ少なり
山ざくらや今つけてもかゝらん
関白前左大臣
よしのはしらすきの月は方に
櫻ちるその木かけも花にほふ
左近中将義詮
のこりし花の方はるの月

まちかねて庭にきくるそかなき

前川知春

けふの月の光もよはけて
別里みちのまきさ一筋

浄永法師

山寺も月のさかりはよにかく

寛文四年三月法勝寺花
下にて

きくのまとやかなうなもん

富忠法師

有明は三日月の月のかけりは
人丸は晴てきやさしそん

前中柳元友知

かきのもとあかくて水になく蛙
かへるや哥の口あるらん

民部てかれ

飛鳥川きのふの淵になく蛙
たれとても又けふをせとよ見

源氏礼

まちの鳥水のかはつの声くに
火よりも行くも花をそえる

壽伝法師

山もりさ木の下つゝし花咲く
光くをまつくるみゆゑなる

前〻〻親長朝臣

春日山もとにはうちの前にし
春日の社にこそりたる
とき月次のまへ方に
見の光をも為行かな

大中臣親貞

神垣の前さく松のけしき
常ろそもまつやそのはるかな

圓何法師

前さく松は行くしもしらさき
山にかかれるをそらる

源親基

前さけれ松さへ花の木にみえて
又いつも別れの花にかかりけり

二品法親王

もし先に帰るもちらの行かし
別れしをゆめのまぼろしにやはるや

伏見院御製

八重さくら見てかすむ夕暮
見わたせば山かさみの花

山階入道左大臣

いまさらもちるの春にしらねて
とりしもしけるにかなし

前中納言有忠

かきり有るよるの月影の空なれと
木のまそゝわくるかけの月
前大僧正孝良
別てこそつゐにはもろきならひなれ
紫の雲もそしる花ちらむ
左近中将義詮
し
別るゝまゝしつくも露はて
下の心やまた知しきるらん
後深草院弁内侍
ゆきゝるみちのしるへおく
寛元々年三月花下連歌に
来ん春をそれと待し色のみかはらぬ
京月法師
後の月見しまてくもなけれ
まつ月見しも老せし時
常暁法師
詠ての心ゝにくらす暮ゆく
関白家千句連歌に
おもふにもたえて思はそ後花れ
とかそ
救済法師
明くるまそれの月影のかゝるとも遣
まちゐとしはとしもかはる
性意法師

春帰る人しかるゝ紫のうへ
田うゑをやいそくらん花の名残
　権大納言実直
一まるもこえん時なしる前し
うきこともいつすきるとかや
　前大納言為氏
わかるゝの名残も春に思ひわかれを
とまらしもかゝるなれ花の名
　従二位家隆
作保祈や花の何とを送るらん

新拾遺集巻第三

　夏歌

さく花のかへる雲のかへるらん
　後光明照院前関白左大臣
上の中の一もかはらぬく
今よりは蝉の声やきこゆらし
　民部卿為定
立かへる花をたかもふかくらく
寛元三年三月花の下の千首に
三月のもとの上への時に
　為世法し
神なる卯月のけふやいそくらん

袖の月かとおもしらぬら
　前大納言為家
かれのらくさとのあつらひ
寂蓮法し家の二十首歌に
ときやよろひのいとのみたれ
かれの色かのうへの下ゆきを
川のよしのみなかみのらね
　十仏法し
よしの山かすみてそのゆ椿
ちるを中々おもしろき峯
　慶運法し
春と春の花の色は　前納言定家

人の親の子をおもふとこゝろ（かう）を
そへて語参り月ふかくてまみ
さけてつらしけれ
身をかへむかしにまかせ如何を
　赤染衛門
暮ても名のみの月はそてすま
このつ声上生行し
　壽何法師
こと葉をみそき親せし保つ寺
ちかひの山と人やとふらん
　前大納言尊氏
此山に又すましてたに住む丈須

月の行氣しく雨乃夕くれ

今上御製

まちいてゝ夜ともかたらへ時鳥
難面のうハし有明の月

従二位行家

知れのつらきことのあつらひ
ひとり眛しき雨のよすから

後二条院御製

時鳥ゐつゝよふの峯の尾上
夕くれのうへのかたもまさりける（行さき）

前大納言為世

山ほとゝきす一声人に告け

山のはちかき月をのこして

隆祐朝臣

名のりつゝいましく空行の時鳥
折しも行ハし山時鳥をきく

後久我太政大臣

五月の空の有明のころ
雨のふるそら夢まつハなく

頓阿法し

あくの月をもをちかねほとゝ須
寛空を月暗つきの花
（のみとの出に）
思ふ人のたゝしをまて

遵生法し
能與声ハすこしも絶えし
しすまくの蓋れとしゝと
頼元法し
あやそらをしもをを移かしけゝを
家月次連哥に
従一位太政大臣
吹きりも為行かしけ能與て作こ
當時入道前太政大臣
また橋のやうとも書もか
延暦四年七月七日内裏七十
韻の出て行けるに

前太政大臣
宮つくり軒の梅やもしや風ほころふとなに
後醍醐院御製
右乃つらゝ白ふかやもか
小しまかけし宮の川岸
関白前左大臣
橋の白ひかりも爪唯く
九右あそ人のたゝかる
前大納言為氏
橋も柳をうけすゝこしくて
正和元年三月法輪寺千句
花や先のまくらもしすひ於る

佐照法し
これかのゝへとまらしとこそ
八橋のくやのえのこゝろ
寛光法し
橋もとを弥ら社振すかはや
芦への水のあそとれ見へ
前大納言為家
五月雨ハ山井のせきもあらはれん
本ほしゝ下ふしの花の暖かう
前原民政
舟よせし草の五月雨
水かさしてこそやるらん

敬縁法し
五月雨のふりまけ姫もの都け
谷乃小川そよとさらくて
前中納言有光
五月雨ハ水上しらぬ瀧落て
のかりもおへ上ハ乃古舟
後鳥羽院御製
ふるさとのあやめしらぬ五月雨に
同しよるにほのつまとめかなり
従二位家隆
五月雨ハ軒のあやめの白露も
前原之信敬氏

うちしのゝめの雲晴るゝ
せきやみくも五月雨の比
則しほらかに庵にかゝむ

従二位家隆

五月雨に高き紀に水満て
とのへたく水鶏の声する

前大納言為家

こゝも明やすき夏の夜の
とりのおきまよふほとゝきす

前参議経宣

明やすき関路の月日数へり
風にこえ行しかつらきの山

藤原長泰

夏の夜は月は雲の空としもて
うちほのかにしらみて横の雲

源氏之

月をそれとしる夜みしかく行て
草の庵まれすらむもこゆらく

左近中将義詮

夏草はまた穂に出ぬすゝきにて
暮ゆく涼しき風に秋近し

後光明照院前関白左大臣

夕の月まつ遠の空くもて
かゝる扇のおもひありけり

深寝織衣といふ心を
かりねには常在のわれ嘆しよりり
ころもうつきく人かやくまさるらん
雲寺入道前大政大臣
つゆの命りましらぬ世の
跡しまふらる浦の下くさ
孝寒法し
帳中のとくへふれつるうち体
おもふに住ていゆましうきよ
風過ふるほとの真葛をを
こゑみる室みうらふらひ
前大納言経継

奉寄ことをしのはせとらの唐や
嵐山かくそ大井川の根衞を
先して主水つゝとのをすりら
ひをあぬまもちのにはつるし
ふらへ川の中へ旅り
作らし
寂山待人といふ心を
うらみ思ひをぞしゑらしぞ
権中納言公雄
今ハこれし思ひすらしにく
さし上の月のそまておる
前参議雅経

鵜川のこりうけまくらして
影くらき夜の暁がらし
従二位家隆
まきの戸をさゝでわがまつ夜ならは
あつさの夏うつくし谷
権律師玄運
月の入ぬまゝしらあまのとをく
影もしら水のよそにふれ
救済法し
衣川の火うつる景とりゐすく
鵜のゝ毛とりのまきさらに
権少僧都永運

鵜うけの舟のかゝしら悼なく
く米のさら山のかけまさりて
良阿法し
わかりしくゝ人をまつて牧を矢
うかりしく庭の雪の空ゝ
周阿法し
牧を夫のちかへるとぎのかけかね
北野社千句連歌に
しらまよふ野の草村
二品法親王
吾のをし何凡し寸就屋
野をゆく旅人の涼しさ

花園院御製

月待山の夕立かつ晴て
移ろひかけも志はしとゝまて

前大納言為兼

山風や夕涼しくなりぬらん
弘徽殿ちかくの女ひの松原

扇をよみ侍る

君をのみ扇の風に立夜の

弘徽殿ちかくの女御

あつしとのみも思ひ（おもひやらう）やらなん
立やすゝ追人やあらん

後嵯峨院御製

そのまゝのまゝ川の夕涼を
入日を人のとこえはあらしな

後深草院弁内侍

あつき日は扇のかせもおもひけり
手まつかう絵も風にまかす時

前大納言家良

扇にも松乃ひゝきを絵にかく

二品法親王

夏の月かけふけぬれは涼しくて
時しそ今は半るとおもほゆ

頓阿法師

かきくもれけしき雪ふる月の宮古哉
宝治元年三月眺出門宣旨
たちよりて
しみづくむてもとしやまた秋なれ
西生法師
つもりし雪か袖も涼しさ
しりしらず夏に杜の下かげ
藤原信実朝臣
ひるまのたより涼しき風吹て
そことしも思ひ出けるかな
前大納言尊氏
夏の日もしけき三ゐの志みづ水

夜ふかき風に松ふくこの中
卜部兼家
月影のやどる清水を結ひけは
衛みちしぐれはかるる衣
参議雅経
うちよせてせきいれし水の泉門
吹風も袖に涼しきゆふべかな
良[illegible]
むすびける山のみの水
平貞時僧正近行家詠侍るに
しのびてつれなき袖しけ
心あらはにつくらるる春とりにかな

[illegible]

てらして誰しもあへて[illegible]

津守國量

[illegible]涼しさ[illegible]

[illegible]読人[illegible]

日かけしのけ[illegible]

[illegible]

性遵法師

[illegible]を秋や[illegible]花の[illegible]

後鳥羽院以脱三字中脱四

字上下脱書本に

[illegible]

前中納言定家

夕顔の花[illegible]宿のつゆの[illegible]

[illegible]

関白前太政大臣

夕[illegible]のつゆの[illegible]

[illegible]のしけとの[illegible]

後京極摂政[illegible]

秋[illegible]やた[illegible]

後鳥羽院[illegible]夕顔[illegible]

[illegible]

[illegible]川[illegible]秋や[illegible]

従二位家隆

風もあからしわしの古歌写

菟玖波集巻第四

秋連歌上

文和二年七月七夕に

禁中にて百韻の連歌侍りしに

今上御製

そよとわたるおきの上風

秋のまつはやうき身なるらん

関白前左大臣

おきの音松のたえにそ風ならし

貞和五年六月萩原殿にて百

韻連歌に

荻の音にしのふ月のかけそ

花園院御製

あきの[illegible]乃袖の夕つゆ
三か月も夜をかさねてけりな

二品法親王

そのふかくなりそふ風も秋なれは
こりしきかへりいかにしくらむ

梶原法し

秋はたゞ風にこのはもさそふらん
尾花がすゑにつゆもこぼれて

前大納言為氏

袖まで夕〆の秋にあはれそへ
木のしたかげのこゝろにもそむ

久明親王

秋ならで夕はたゞあはれ袖の露
ことぞその色もつゆにまさりけり

後深草院弁内侍

わけゆかば露もくさばのしのはら
ニ寸のまよけし風ぞふくらし

前大納言資季

七夕乃あひみるほどの夕ぐれ
まつやこしもあふせなるらん

信実朝臣

まれに逢夜はたもとをぬらす天の川

元亨三年七月亀山殿七百首

まれに
まちえてし逢ふ夜もせてあかず
従三位行能卿
新文ふゆるとも銀河
雲ゐそしのはけかなる
前大納言為家
烏羽玉の夜わたる月の銀河
またもなく秋をしらしよの見
夢窓国師
七夕も眠りてくさやむかしもと
ふるさとの雲の下にて
性逸法し
星合の空七夕の日数へて
救済法し
秋にあふてぞ思ひけれ
七夕もこよひ扇のつまとらで
ふるさと老の命なりけり
源親元
風まさき秋の柳のまにおらで
今す月のなかにそくちて惜
良阿法し
玉章をよせきつまの秋風に
明まち渡り付給へ
前大納言氏忠

夕日さすかれ松乃秋風
身のうきことやおもふらん
関白前太政大臣
うけの庵は山のおろし風
天和も二年八月乃十五夜
おなしく月の夜はさえて月とも
寂蓮法し
おきゐてみれは風そ萩のへ
月とも見て桃ても思ふらむ
頓阿法師
風ふきさは庭乃萩かく
秋風やおもかけましきさ

藤原為秀
庭みる萩はことしとこその面
懸けてみることに秋とも思ふらん
救済法し
故郷はさきとも秋ぞ似て
草の葉に聞く調への声と云ふて
二品法親王
とまりの秋もれてそひて
秋のとまりと風そ見えけれ
前大僧正俊
中宿の萩にて萩の末とて
おりしもこえて宿の秋音

中納言定家
こそゑん路の萩（まさき）の秋の錦
ふかくて秋を経て恨む
山階乃にたえね
風也ゝ小路乃浦ゝ雲有ゝ
山ゝ麻乃高路ゝ有ゝ出

関白前左大臣
物毎にうらしきうらや秋の夕れし
紫のゝらそゝ月の眺めの

と上以親
身にそふちとの峰と見れは
月ゝ氣も不ゝられかゝらゝ

左近中将義詮
こうしよりも難波江の秋
月出ぬれし汐戸のゝ紅

権大僧都源恵
高嶺ゝ山ゝもとに如かゝり
月も高根の嵐を見えし

権少僧都永運
秋高めゝ色つゝそゝ山ゝそ
紫の扉乃萩のうは風

常光法し
夢ゝゝ秋の田の面も見つゝそ
風まかせつゝ衣もまさ

富忠法師

紅葉の花にまさるも有なり
貞和四年六月なかの千句に
咲つゞきの秋の夕くれ
左近將監直頼
おき色の見わくる花にあかなかし
なきさりのうらさやはしられぬる
前左近將監力頼
その ちらにをける白露
絶やふつ雨に袖のかはくら
権律師定暹
尾花なひく風の下草そしかなる

よはしも思ふ千草のもれ子
頓阿法師
松風の音と岩やの秋ならく
文和四年五月関白家の[illegible]
千句に
身をすてゝまよひはやくる世はしなる
権少僧都永運
秋乃ころさへ深き山に住と
筧しかゝる庭の水てしこ
性遵法師
花すゝきひくへうきにまとはし
秋乃わかるる袖の白露

良尋法し

よるはなれの風にふきまよはし
とまの寺路遠のうつゝの言にて

左近中将家

入江乃あし花又うつりの水と
いくらかやとも秋の夕風

新参修宗ほ

てのかう山の尾の松ひゝし
おりて松かる月もかくしけり

中納言忠嗣

夏生て新かもかゆや結かん
今もうつゝこのてを思ひみさむら

藤原忠頼朝臣

よるなれとことし浦にちかく
月とゝころの須まにみつらん

前大納言尊氏

浦傳ふせとの内を風のふきそえて
舞佐の月も経ようしのゝ

藤原長秀

あら磯の松のし枝につゆかゝて
かゝるこえて月におもはれ

素須法し

雲らすの松わくるしはつく
志えらくしん出わきめくる

藤原家隆朝臣
うき身には月に袖しほる
かけてもおもふとみのかなし

後鳥羽院御製
風ふけは露ちるかたのこのはもて
後鳥羽院の御前にてかくなむ
尾花ちりふきつたはれのそて

西園寺入道前太政大臣
身のうきをそのなけき恨かなしそ
くもるともく詠むらん松の風

前中納言定家
ゆふへくるる江の川なり

ひとりや松も枯えもかなわぬ

善阿法師
秋くれともそのいろとはせぬ常盤山
峯よりおろすやさしき鳥かな

頓阿法師
夜はすがらひろきことときは時雨かや
月のうけそふ何つきの空

吉田兼好
宮城山や小萩の秋風ふくらん
月かけそむるさか山もとにしれ

慶運法師
かくありとかたる秋のしるし

めくる枕に月そのこれる

左近中将義詮

うらかれやむしのねよわくなりぬらん

よわりゆく秋の夕くれ

福光園院前関白左大臣

荒まかきの花のやかてしをるらし

人しれすなとうちなけく

下はふ袖の名よ出めん

後鳥羽院御製

時雨ゆく宿のしら萩うつろひて

同し山なからもまたうらのはに

山萩かうちる雲の下ける

従二位家隆

萩の花もちりやしぬらん

唯一もと秋もしらくて

救済法師

草ならぬ花の車の跡に生ぬ

松をかきこすかうの行す

古用や花の萩の戸わきて知く

唐人の衣まく袖やぬれぬらん

後光明照院前関白左大臣

尾花そよくまくらの風

宝治元年八月十五夜仙洞云々

山里ハ人のたよりもなかりけりとふ
後深草院少将内侍
そよとてもすゝしき萩の上風に
前大納言為家
うち払ふ袖こそしらね秋の上を
わけもこそりも袖そつゆけき
祝子内親王
松まつ夜のあらしの下のあれすさき
山のはつかく松のしつゐ
関白前右大臣
水なれし月もうけたりやたまのかゝ
せきの夕のかつらのかけ

救済法師
一本は松もさひしき月清み
夕くれ秋やゆくらん
頓阿法師
月出る山よりさとし
麓のさかしの道の山かけ
二品法親王
ちもり月にもほころふし
つらりかるもしくらしの声
前大納言為氏
袖うらの月なきよ向ひなれ
唯この身のかけとまるかな

源雅孝朝臣
月はよも山のあくまて住べし
毎をとうすれおとこゑの里

源信武朝臣
空は月のうつしの里人を
独り寝に有明さよの夜も更て

藤高秀
月もすかしし秋風ぞやく
面てそ山か思峯の山寺

寛恵法し
山ふかくまても月をとふ人を
松秋としてさてくる

素阿法し
月見まくやしらすまて更にけり
谷水に岩の下ゆくおとはして
松吹風も秋の夜風
月のゆくへにそれとしられ
雲のうちそれ秋といふ道

潤阿法し
かけ清み山のは出て月ならし
袖にうつらむ露のかかるらん

二品法親王
月の上はさきともなく人を程なし
あふ夜迄すきしの秋風

権大納言為世　定為兄
月はけふたひて遠くなるみさ
弘安三年八月日吉社八人ニ奉
納の日よりまうての中に
いつも月おもひすてこそ
法印定為　為氏子
あけは二たひへのこの秋の月
あかしも秋なる沙風そ吹
源信詮
月をもることも漫もひとつにて
帆乃影にあかさなりけり
権少僧都親祐
こよひしも月の江に舟とめて
しつくをうくる松のしたかけ
三河法し
さらにまたかゝる月もすみて
すゝめのひかりによしみたかしそ
前大納言為家
神もしくて月にあらはれし
ひしきにも秋やきぬらん
後鳥羽院御製
春日山峯こもるにしも月は
後鳥羽院ニ妻寿すゝめ序
鹿の声人もしくもしる杉

従二位家隆
月出しる峯のうき雲
正和二年五月伏見院百韻（其年に）
木隠より峯のうけのこしそしつ
伏見院御製
月もつかとの夕やとの空
宝治元年八月十五夜（其年に）
星の影も住うかる今宵さへ行く
山階入道左大臣
月をわかて住らよの宿
花やこれ有八日もおかへり
高階重成

月かや水のなかきは申らん
なにもちらぬを落る一筋に懸る
良阿法師
秋の夜ふかき月をやかなる
宝治二年三月花下にて
月のかけをやすれひとよりも
道生法し
冬の月の宿かへすれあと
おもしろく宿に出る音
善阿法師
都もる庵の月の影かな
夕日のこゝをあれゆかり

素阿法し
山よりもふかくて月のかけを行く
峰のあなたそ聞ゆなる

藤原長綱朝臣
山のはや月の出るをもまつらん
木末もけしも松の秋かせ

寂蓮法し
山のはや月の出をまつらん
雲もなくとの晴てさやけき

二品法親王
出る月も二つ乃ことに見ゆれて
松の高さは嵐そまりの上

関白前左大臣
山里はそれの峯より月出く

菟玖波集巻第五
秋連哥下
きりのうちもつてるあさ風
前大納言為氏
松原の末のかたより月の出る時
人くるらし　雲のよそかは

孝尋法し
出る月のかけまてみえてくまもなく
ひろ深しき松かせそよく

救済法し
住よしのうらの雲も月きよく
高くふかく岩の中垣

性遵法し
呉竹の末葉風に月さえて
高嶺まて照しきらやましろ

如阿法し
月まち出るあわきの夕くれ
外にかゝる柴の戸の秋

宮と法師
雲を出る月を遥ゝくそ
更ゆくる山にかゝるのわかるゝ

二品法親王
月もしる柴のとの秋 門
さそふ人のゆふ良のかな

従二位家隆
月を待ちし山のはけの霧はれて
君をまとこゝろなかるに

前右衛門督為能
月にうかれ渡る秋をとらへて
六条内大臣禅林寺の家

くもまよりかゝらしに
ワすれてもわすれてや出らん
前中納言有綱

嵐の月かけ移る志賀川
秋ふかくなる小田乃かりほ
西仏法し

いまそ乃月はいくよをかへすらん
ニはおも乃おもひくもしらず
高信上人

村雲と出つる月の入かたく
程なき庵の秋をまかすらし
やすく
柀源法師

よこ雲に入まとの月かけ
住のえひろく江に定かたく
了覚法し

紫の雲の月に雲のあきそ家けれ
一かゝる山乃はしまさらん
関白前左大臣

暁のむかしの松月夜ふかく
かくされての世に住らん
花園院御製

こゝろすみけしの水に移る月
旅ねすみ住む人ハなかりし
前中納言為氏

山のはにしはしも月をすまさなむ
ねかふこゝろの荻の上風

二品法親王

とあまる月みつや通ふらん
柴の戸をそのゝ秋のおもしろ

前大僧孝証

月にほれ明ても夜をやわすらん
かりねする宿の秋もしる時

敬源法し

むしのねもさうしの枕に母月の色く
つまの花やゝ前のなるらん

本證法し

月おゆる三園の戸を明て
やまひある身のねられおし

頼之法師

鴫もとく月夜にすの声寒く
そらのに身にしみて

従二位行家

入月を人もさそはてましもせ
松からうすや宿の空ならん

前大僧正賢俊

真葛のや月ふけゆきてかはりに
あつ風の七夕のまてに
夕月もしくるゝ秋風

後光明照院前関白左大臣
萬まりのさくらに山の月にしく
二品法親王北野社百首
かりけるに山のしら石
　尊道法師
浮雲のいく度月にかゝりけん
かしの綵の錦やよそにまかふる
　慶阿法師　上今
月のかたふくまゝに浮雲
暮れはてし越の関やまよふらん
　菅原宗親
雲こそ月のこゝろなりけれ

今はさもくつらの声
　小槻量實
底越る月も雲かくれゝく
うらしもなけきの年の夜を有
　權少僧都永運
此里の向ひの岸に月出て
川浪しはおくし山の方を
　權少僧都頼快
槙しけりし木のまの月をみてそ
つゆのおもしるや夜やかれん
　神主忠資
下てらすひかりのよしの月ゝく

みをしるの袖の上にも
前中納言為秀
月清しあらしふけゆく庭の面に
松かけはなほさむき風そして
前中納言資経
うき世をも山の端月のかくれなく
浮にはゆるをしらぬ川上そ
十仏法師
かくとしも月をまちて
□親王北野の社千句興行に
法楽にして風をあらはれ
尊参法し

寝月山をこえて為ある夕べ
かすみの里の秋とは
常光院法し
月をこそおもひやしられてかへなん
此夕かはその身をまたまし
源成資朝臣
月はさやかなるこの比かは
来りて雲の上の人の手
源季直
春のまつくの月
松風の音も岩やの秋ならく
沙弥[illegible]

月の遠きや[illegible]
十とせにて[illegible]
前中納言定家
秋の夜は[illegible]も月の月
末の行ゑこそいとゞあはれ
寂蓮法し
ひかりあらん人の[illegible]
月はしらてさこその過[illegible]
法眼兼澄
寝覚めや人も磯を[illegible]
久しく白[illegible]の花
後光明照院前関白左大臣
春まては田の水に秋[illegible]
うかれし鳥[illegible]やまつらん
左近中将義詮
門田乃わさいゝありけり
花もし梅そみなあへる
関白前左大臣
暮みえし[illegible]秋[illegible]
藤庭宮[illegible]春同神木[illegible]
還しも[illegible]にて詠侍る（ほとに）
しほしく此枝深くし家の
百首歌中に
[illegible]の秋の秋をとこしへ

性空法し
春りの月やこ庵の夢さらん
書え志ゝの声のきこえち
後久我太政大臣
岩ちおし稀のこ庵の夕しきを
明ひらくすゝしさこそあれ
前中納言忠
ひかり住けつゝの庵の月の比
山路を出ちち庵もここを守るの中
前大納言為氏　為氏り
萩むら風のゆかり右
月にこそこの庵こりこそ行れ

前とゝ治資顕
松の葉秋の風そ渉らてゝ
人つまさすゆうけしるゝ波まを
とゝろきし　色の竹も怪まゝ
後鳥羽院御製
弘安二年八月七日庚申当座に
よしとこの居吹て秋風を
後深草院御製
まれまひかりこ庵もあらなん
暮との秋の山やまかなん
二品親王

かゝみてふいはまかゝりける唐の名の
木の下つ思ひ寄をやすらん
権僧正良瑜
宮木のゝ萩に志かなく夕まくれ
月出ぬるしつくにそこにかゝる
左卿顕忠
素ひの志つめのはも夕つゝそ
文和二年六月あめの日に
それかれまゐり侍しと
あはれなる秋のいろを知と
関白前左大臣
山は里みも志らやあるらん

夕つゆのむすひもあへぬ稲葉哉
藤原倫篤
山里の庵や袖をしくらん
声まさりけり時雨秋風
大江成経
村雨のなこりはれ行月にこそ
康暦二年七月まゐりに
後光明照院前関白左大臣
袖ぬらす秋の思ひをしらせて
後醍醐院御製
宇津の山つたのほそ道ふかけれと
たとひゆく夕は秋とたゝ知を

今上御製
秋乃ゆくし浪らよのつゆ
さゝらやのころ浪らよの湖
左近中将義詮
暁のゆめより後も上ぶし
衣にしむる露いくつ
導誉法し
むしの声より秋はすゝしく
明わたらしゝ月ふかし
権少僧都永運
まちかねて夜も君かくるよの月にく
しからくもゆかるゝはちかぬ
救済法し
竹たちの秋のくらきを出にけり
二品法親王家百韻連歌に
光くる年は世中の月
周阿法し
萩根のたもとにしれぬ露をかく
虫えんと秋や別るらん
藤原信前
紫のくもやとしの時雨山風
こけまそとふのうへやかるらん
二品法親王
下ちは山の時雨のそゝふかくまて

月ならて草の紅葉はふかみ行え
前中納言為兼
よるの虫やとるとおもひしらん
あきはてしのにたもともぬるる
按察法し
山かけの中の志のやまもとにおく
うつりの秋そこはかなりけれ
藤原朝臣
澄人は深き砧をうつらんと
このおもひは浮草の上
寂然法師
あともなく秋をうつろふの声かな

此頃をこそこの木の葉におくつ
それ思ふかやまの錦をちらすらん
錦のとこもしやはらん
能阿法師
山かけの紅葉をわけて秋の戸
雲ことはりのひとつ都山
惟宗親孝
松紅葉ふかくしの時雨のふるらん
雲のしたそもえたる風
浄永法師
紅葉ちる秋の行くしの月の行 風
秋ゆすしあふさかの山かけ

寂蓮法師

そよかゝらもその木の間に月かけて
野辺の山の秋におもふ　松風

藤原親長朝臣

霜時雨色も定めぬ梢には
つゆとも[illegible]し風の下さき

寿任法師

ひとりかくおもふ松の時雨哉
しくれもや思ふ峯の松かせ

藤原氏秀

うけおもふ夕日の山に紅葉して
夕日さへして峯の村雲

二品法親王

れいゝゝしの露ふらて
まれなる松の秋をとめかし

関白前太政大臣

かきくもの山にれいゝし[illegible]
雨そゝきてもやまさへうれ

六条内大臣

かゝるまの人の紅葉すゝれ
まれてこゝ色や海女かな

按察法師

ひとしより草薙秋しか思へとも
あれしおもふ庭の紅葉

夢窓國師

裏枯る身にはしすゝ屋由遠
尾花かときくは爲秋の風

善信法師

かねてよりあはれしらぬ身にも年
文和四年五月歳の子日を
月をさえしてゆふをとき〳〵

関白前左大臣

足引の山の秋の露をきて
紅葉ちらく山風そうらふ

當貞法師

毎と思ふ木の下つ露の時雨そ

雲ひこよひの月をひらくそ

蓮智法師

あはれしけ思秋そかさね
雲居る月はいつくも見け遠

源親頼　杉氏り

行もし思秋そしれぬる
尾花家のうちはちるらんかり

救濟法師

袖ぬるはなきつれはかりの月そて